

外国語における言語的創造性

広島大学大学院 山岡俊比古

1 はじめに

パタンブラクティスの有効性についての論争を調べてみると、それを有効的であるとする立場の主張と、それを有効的でないとする立場の主張とが互いにかみ合っていない場合が多いことに気づく。パタンブラクティスが現代的な言語観と矛盾するものではないとする T.G. Brown の論文(1)は、もともと、L.A. Jakobovits の現代的言語観、現代的心理学を軸にしたパタンブラクティス批判の論文(4)と完全に対立しているが、このことは、前者の論文が後者の論文の返答として書かれたということ を考慮に入れると、非常に興味深く同時に理解するのがむずかしいといわなければならない。相方の主張を十分に理解するには、この二人の論が交錯しているところを分析してみる必要があると思われる。その有力な手段として、今日さかんに主張される言語の創造的面という点に着目し、そこから分析してみたいと思う。Brown の "What constitutes a pattern in the domain of syntax?" (1:193) という疑問文は非常に重要な問題提示を行っていると思われる。つまり、言語の創造的使用を可能にするものとしてのシンタックス(これは後にふれる)の中でパタン(ここでは多分に structural pattern の意味だと思われる)が言語使用の立場からどんな位置づけを受けるのかという点についているからだといわなければならない。最終的には、この疑問文に言語使用の立場から十分な解答を与えることがこの小論の目的になる。

2 言語の創造性

まず、言語は創造的なものであるとは一体どういうことを意味しているかを確認しなければならない。ひとつの見方は、我々は我々がまえにきいたことのない文を口に出していうことができ、聞いても分るという事実を認識することであり(5:104)。つまり、まえもって知っていないものをそのように発話し理解するというのは、逆にいえば、我々が発話なり、解釈なりをそのつど造り出しているということになる。もうひとつの見方は、それを行動主義的言語観に対峙するものとして捕える見方である。行動主義的言語観によれば、言語はパタンからなり、そのパタンは習慣的なものであり、刺激と反応の連想を習慣づけることによって獲得される(2:53)と見る。しかし実際に言語の運用を調べてみると、このような行動主義的見方では説明できない面が多くあることが分る。そこでそのような言語の面を説明できるものが要求されるわけであるが、それが言語の創造的面への認識につながってゆくわけである。以上のことをまとめてみると、言語の創造性というのは、言語の中に含まれる可能な文の数は無限であり、従ってそれは行動主義的立場では説明できない(8:322)、という言語の面を指摘したものである。上で述べたことつまり、言語に無限の文が存在し、それを説明するのに行動主義的言語観では不十分であるということの簡単な証明がある。これは G.A. Miller によるもので一見馬鹿馬鹿しいようであるが、その実意味深いものと思われる。つまり、言語に頻繁に生じると思われる、20語からなる文のすべてを口に出していうとすると1千億世紀かかるというものである(6:30)。もちろん Miller が主張したいものは、言語とは創造的なもので、行動主義的言語観では説明できるものではないということである。

3 言語の創造性を生むもの

さて、以上言語は創造的な面を持つことを見てきたわけであるが、それでは、そのような言語の創造性を生むもの、それを可能にするものは何であろうかということが問われねばならない。

結論的にいえば、ある言語の創造的使用を可能にしているのは、その言語の規則体系だといえる。注意しなくてはならないことは、その規則の体系というものが、いわゆる記述的な文法規則体系ではなく、文を生み出すための規則体系だということである。このことは、獲得すべき規則体系を 'generative grammar' であるとするもの(2:30)、新しい文を生み出し理解するための文法とするもの(5:104)、可能な語のつながりを生成する規則とするもの(6:30)等の主張にも明らかである。

4 規則の獲得と外国語教授への関連

さて、言語の創造的使用を可能にするものとして、その言語の、文を生み出すための内部化された規則の体系というものをみてきたわけであるが、次に、そのような規則の体系がどんなものであるか、あるいは、どのようにして獲得されるのかということが問題になります。この問題を母国語の場合に限ってしてみると、これは心理言語学の中の発達心理言語学で中心的に扱われている問題である。そこでは様々な研究が行われ、様々な仮説が提示されているが、明らかになっていることは、子供は文法を獲得するために、文法構造を模倣し、それを練習することによっているのではなく(3:460)、自分の周囲での言語に触れ、自分自身でその当該言語の規則体系をつくりあげてゆくということである。しかしながら、その規則の体系の獲得の具体的な、仔細に入った過程はまだほとんど分っていないというのが事実である(7:133)。「従って」ということばを用いてもよいと思われるが、外国語の場合の獲得の過程も分っていないといわなければならない。また、問題をさらにむずかしくするものが、さきにも述べたように、内部化される規則が言語記述から出てくる規則と異っている可能性が大きいということである。

これまでのべてきたことを要約すると、言語の運用は創造的なもので、習慣づけでは説明できず、その創造性を保障するものとして、その言語の内部化された規則の体系というものが仮定されるが、それ以上のことはほとんど何も分っていないということになる。

このような状態で、上でのべてきたことの外国語教育に対する implications を求めようとすると、それが非常に限定されざるを得ないと予想されるが、J.A. van Ek は、せいぜい主張できることとして次の2点をまとめている。

(1) 習慣形成は決して十分な条件ではない

(2) 生徒は「豊かな言語環境」の中におかれるべきである (8:325)

(1)の習慣形成が余り意味を持たないというのはさしおいて、(2)の生徒を「豊かな言語環境」の中におくというのは少々問題をふくんでいるといわなければならない。つまり外国語の獲得を母国語のそれと同一視しているということである。外国語の獲得条件・過程が母国語のそれと同一視できると確認されたならば、この主張ができると思われるが、この問題についてはまだ論争中であり、いかなる結論も出ていないことを念頭において考えてみるとこの(2)の主張は多分に希望観測的な主張だといわなければならない。

5 外国語としての見地からの創造性

さて以上創造性に関して論文にみられる論調を概括してきたが、注意しなければならないのは、

私が最初に念頭においた T.G. Brown の疑問文に答えを与えようとする方向では論が進められていないということである。とられた論議は、母国語について主張される創造性というものを、それ以上分析することなく額面通りにうけとり、それを外国語に適用したものである。言語の創造性というものの主張が、行動主義的言語観に対するアンチテーゼの意味で、過度に強調されている点も見のがしてはいけなと思われる。それはともかく、言語の創造性というものを外国語としての見地からもう一度検討してみなければならない。

言語の創造性を二つの面から見る事が可能だと思われる。

- (1) 発話の心理的過程が習慣づけられた刺激に対する反応としてあるのではなく、文を生み出す規則にもとづいていて、そのつど話者の内部においてつくり出されるものである。
- (2) 出された発話がそれまでに聞いたり、読んだりしたことのない novel なものである。

まず(2)の発話が novel なものであるという点からみた言語の創造性というものを検討してゆきたい。もし発話のすべてが novel なものだとしたら、そもそも communication は成立しないということに注意しなくてはならない。発話が novel なものであると主張されるのは、実に、そこに示された文が、習慣づけの結果として前もって知られていたものではないということを行っているのであり、その発話の中で用いられる words または morphemes は当然のこと、それを配列する syntax もなじみのものであるはずである。逆にいえば、そういう共通の基盤があるからこそ communication が成立するわけである。この立場から言語の創造性を分類することが可能であると思われる。まず最初のレベルは、発話される場面も、あらわされる意味も、用いられる文構造も全く変わらないもので具体的には "Good morning.", "How do you do?" 等で、むしろ創造的でないものがふくまれるレベルである。次のレベルは、用いられる文構造がほぼかわらず、あらわされる意味が novel なもので、これは発話の syntax を分析すれば典型的な pattern が出てくるとと思われるレベルで、その pattern の中で表現される意味は novel なものであり、一般の言語活動が最も頻繁に行われるのはこのレベルだと思われる。Brown の疑問文がここで意味をもってくるがこれは最後にふれる。次のレベルは意味が novel なだけでなく syntax も部分的にしる novel なもので、典型的には、詩に用いられる言語だと思われる。文学で用いられる言語を 'deviation from the norm' と呼ぶゆえんである。

以上言語の創造性ということを外語の立場から3つのレベルに分けて考えたわけである。もちろんこの分類は大まかなものといわなければならないが、1のレベルと3のレベルは例外的なもののみならず、中心になる2のレベルをさらに分析しなければならない。

ここでひとまず言語の創造性の二つの面としてあげた(1)を検討しておく必要がある。これが言語の創造性の中心的議論を形成しているものと思われるからである。これは文を作り出す心理的過程に言及したものだといわなければならない。言語の創造性を保障するものとしてその言語の内部化された規則体系を指摘し、それが習慣形成では説明できないとするゆえんである。(1)の意味での言語の創造性とは結局、発話の心的過程、文を造り出す際の心理的過程が創造的なものであり、それが習慣づけの結果に依存しているのではないということに主張していることになる。ここで注意しなければならないのは、言語の創造性を可能にする内部化されたその言語の規則体系は、その言語を話す人々に共通のものとして存在しているということである。

二つの視点から分析した言語の創造性をここでかみ合せてまとめてみると次のようになる。発話という行為は文を造り出す過程において創造的なものであり、表わされた意味(この意味の中に場面も含めるとする)関係において novel なものであり、聞きとるという行為においては発話を内部化された規則体系によって解釈する過程において創造的なものである。

言語が完全に創造的なもので novel なものであるならば、それを用いての communication は成立し得ないということを改めて強調する必要がある。言語の創造性を可能にする規則の体系は、その言語を話す人々に共通のものとして存在しているといわなければならない。パターン (structural pattern) というものが出てくるのは、このような共通の規則の体系からである。ここで Brown の疑問文が意味をもってくるわけであるが、研究がまだ十分でない。しかし次のことは事実として主張されなければならない。パタンの概念と言語の創造性は互に相反するものではなく、言語の創造的運用の中にパターンを位置づけることができる。しかしパターンを習慣づけの結果として見るのは正しくなく、内部化された規則体系に基づくものとして見なければならない。外国語を扱う者から見た以上のような言語の創造性およびそれとパタンの関係を中心にして、外国語としての英語教育を検討し直すことが必要である。

REFERENCES

1. Brown, T.G., "In Defence of Pattern Practice," LL, XIX, 3 & 4, 1969.
2. Chomsky, N., "Linguistic Theory," in M. Lester (ed.), Readings in Applied Transformational Grammar, New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1970.
3. Bwing, W. K. "The Mentalist Theory of Language Learning," FLA, 5, 4, 1972.
4. Jakobovits, L.A., "Implications of Recent Psycholinguistic Developments for the Teaching of a Second Language," LL, XVIII, 1 & 2, 1968.
5. Krohn, R., "The Role of Linguistics in TEFL Methodology," LL, XX, 1, 1970.
6. Miller, G.A., "The Psycholinguists," in M. Lester (ed.), Readings in Applied Transformational Grammar, New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1970.
7. Peck, A.V., "Teaching the Creative Use of a Foreign Language," A-VLJ, IX, 3, 1971.
8. Van Ek, J.A., "Linguistics and Language Teaching," IRAL, IX, 4, 1971.